



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自閉症スペクトラム障害の成人当事者が抱える「自分」 : M-GTA を用いた質的研究
Author(s)	木谷, 岐子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 122, 1-25
Issue Date	2015-06-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.122.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59465
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_122_1-25.pdf



自閉症スペクトラム障害の成人当事者が抱える「自分」

—— M-GTA を用いた質的研究 ——

木 谷 岐 子*

【要旨】 本研究は、ASD の人がいかなる「自分」を抱えてきたのか、当事者の語りからその様相に迫ることが目的である。成人後に ASD と診断された 10 名に半構造化インタビューを行い、診断前から現在にかけての「自分」について聞いた。M-GTA を用いて分析した。その結果、ASD の人の「自分」を尋ね出すプロセスは、「おぼろげな自分」を抱えつつなんとか他者と関わって生きようとする中で動き出していた。さらに、「身体の訴えをきき流す」ことで「苦悶のサイクル」を巡り、「身体の訴えをきき入れる」ことで「調整のサイクル」へと転じ、「人の中で生きられる自分の形を探す」試みへと導かれていた。しかし、「人の中で生きよう」とするゆえに、再び「“できなさ”の中に自分を垣間見る」こととなり、「苦悶のサイクル」に戻っていつてしまうこともある。こうした行きつ戻りつの巡りの中で、「自分」を尋ね出すプロセスは続いていた。

【キーワード】 自閉症スペクトラム障害、成人、自己、インタビュー調査

1. 問題と目的

(1) 問題の所在

DSM-5が2013年に出版され、広汎性発達障害から自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder: 以下ASD) への変更があった。診断基準は、①社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害、および②限定された反復する様式の行動、興味、活動、の2つの領域にまとめられた。そして②の下位項目に臨床上的特徴としてよく観察される知覚過敏性・鈍感性など知覚異常の項目が追加された。

Kanner, L. (1943) は、自閉症というあり方を発見し、その本質を他者とのやりとりの困難性に見てそれを伝えた。その後は幾多の原因論が自閉症研究の潮流をつくり出すこととなった。Rutter, M. (1968) が、自閉症は心因性の疾患ではなく、器質性の障害であるという認識を定着させた。その認識は現在も脈々と受け継がれ、医学的診断基準において、ASDは神経発達障害に位置づけられる。もう一つの潮流として注目したいのは、自閉症の軽症グループの存在を示したWing, L. (1981) によるものである。Wing, L. (1981) は、正常範囲とされる人たちと自閉症の人たちとの連続性を示唆することで自閉症概念を拡大した。この流れの中で、知的な遅れを伴わないASD当事者による手記が注目され、ASDの人の内的な体験世界が知られるようになった。昨今ではASDの人の自己の領域にも研究が及ぶようになっている。

(2) ASDの人が抱える「自分」

自我・自己の領域には安易な概念整理を受け付けられない難しさがある。一般的には意識の主体を自我とよび、意識の対象としての自我を自己とよぶ(越川, 1999)。本研究もこの定義に従うが、自己を日常的な表現に直し「自分」と表記する。また、「自分」を内なる他者 (Wallon,

* 北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程
DOI: 10.14943/b.edu.122.1

1956) との内的な対話と捉え、自我二重性 (浜田, 1992) という構造にもとづく現象と理解する。

Wallon (1934) は、自我を、個人の身体的情動的活動であると同時に、他者との共同的社会的な関わりの中で形成されるものとして捉えている。個人の身体的活動である情動は、呼吸や循環を早くさせて息切れや失神をもたらしたり、運動器官に痙攣や脱力を生じさせたりと、外界に適応するための本能的な活動をするのに「有利と思われるものは少しもなさそうである」と述べられる。だが、この一見生体にとって邪魔なものとも思われる情動は、他者を巻き込む圧倒的な力を持ち、「他人の心を通じて何かをしようとする行為」であるとされる。つまり「個体同志の間で関係をもつこと」のために人間には情動が発動する機構が備わっているという。このように、情動は個人の身体内で起こるものであるにも関わらず、同時に本来的に共同的なものと考えられている。Wallon (1956) によれば、子どもはこうした情動の働きを支柱に、他者とのやりとりを通し、3歳頃には「自分の中に内なる他者を見出していく」とされる。内なる他者とは「内面世界と周囲の具体的世界とを繋ぐ媒介者」の役割を果たす。そしてそれは「腹心の友」であり、「助言者」であり、また「検閲官」として、「心の内の議論の支え」となる。

浜田 (1992) は、Wallonの理論から着想を得て独自の自我形成論を展開する。「自分」とは生身の他者との間で積み重ねられた、能動-受動のダイナミックな関係 (自他二重性) が束ねられた、内なる他者との対話であるとする。そして、その内なる他者との対話によって「自分」が「自分」を見えるという二重性が成り立ち、その構造を自我二重性と呼ぶ。ここで言う能動とは、自分が相手に向かって働きかけることで、受動とは、相手が自分に向かって働きかけるのを受け止めることである。自分の能動が相手の受動の中に受け止められ、相手の能動が自分の受動の中に受け止められる、この能動-受動の相補性が、対人関係の重要な契機として働くとする。浜田 (1992) は、ASDの人は他者とのこうした能動-受動のやりとりに困難を抱えるため、内なる他者が醸成されにくく、「自分」が成立しにくいのではないかと仮説を述べている。また、自閉的孤立とは「自分」の殻に閉じこもるということではなく、むしろ他者との関係の中で「自分」の殻を形成することに困難を抱える状態だとも述べている。

さらに浜田 (2009) は、自閉症児者の症状 (振る舞い方) を、個体内に内在する障害の直接的発現として静的に捉えるのではなく、周囲の対人・対物の環境世界に対応しつつ形成してきた結果として、動的に捉える視点の重要性を指摘する。鯨岡 (2005, 2007) もまた、障害の全てが個人に内発するものではなく、周囲との関係の取りにくさが障害の上に累積され、増幅されとの考えを示し、関係発達という視点でASDを捉えている。そして、行動面、能力面の困難さから対象者を捉えるのではなく、あれこれの思いをもって今を生きる一人の人の全体像を捉える視点の重要性を指摘する。この関係発達という視点は、小林 (1999, 2000, 2005, 2014) によるASDへの早期治療法である、Mother-Infant Unit (以下: MIU) の実践に生かされている。ASDの子どもが浸る、原初的な知覚が豊かに働いている世界と、大人が浸る、知覚が高度に分化した世界とのギャップを埋めるため、親の側が感覚を研ぎ澄まし、身体と情動を共鳴させ、その場にふさわしい言葉を語りかけて、子どもと関係していけるよう促す実践である。小林 (1999) が、ASDの人の内的世界を理解する上で重視する特徴である、原初的知覚様態の継続とは、乳幼児期早期における独特な知覚の特徴で、相貌的知覚 (physiognomic perception) (Werner, 1948) や、生气情動 (vitality affect) (Stern, 1985) を含む知覚様態とされる。相貌的知覚とは、知覚する対象を運動的・情動的に把握する傾向のことで、人と物、主体と客体が融

合された状態で知覚されることをいう(Werner, 1948)。生気情動とは、例えば、波のように押し寄せる、溢れんばかりの、など、従来の怒り、喜び、悲しみといったカテゴリー性の情動と区別される、名前の付けられない情動を指す(Stern, 1985)。こうした原初的に知覚された体験は、母子間で展開される情動調律(Stern, 1985)によって共有され、抽象化ないし概念化され、ゆくゆくは言語で象徴されていくと考えられる。しかし、ASDの人はいくつになってもこの原初的な知覚様態が継続されているという。その理由を、小林(1999)は二つあげる。一つは、彼らが生来的に非常に強い知覚の過敏さを持っていること、二つ目は、そうした強い知覚過敏の世界に浸されている子どもとの情動調律は自然には展開されにくく、母子間で体験の共有に躓くことで、言語で象徴される経験を積み重ねることができないためだという。MIUはこうした傾向が見られ始めた乳幼児期早期に、養育者との間でいかに情動的コミュニケーションの成立を促していくか、という視点で研究が進められてきた。一般にコミュニケーションは、言語的コミュニケーション(verbal communication)と非言語的コミュニケーション(non-verbal communication)に分類するが、小林(2000)は、象徴的コミュニケーション(symbolic communication)と情動的コミュニケーション(affective communication)に分類する考えを示している。前者の分類は、音声言語か身振り言語かの違いが焦点となっており、後者の分類においてはそのどちらもが象徴水準のコミュニケーションに包含される。つまり前者の分類では情動水準のコミュニケーションは概念上扱われていない。情動水準のコミュニケーションとは、相手の感情状態と一緒に傍にたたずむだけで容易に感じ取ることができるようなコミュニケーションで、双方が身体そのもので共鳴し合うような性質をもち、かつ同時的なものとされる。小林(2003)は、この情動的コミュニケーションを間主観性や間身体性という概念と同義と捉えている。MIUはこうしたコミュニケーション理論を背景に持つ実践である。

浜田(1992)、鯨岡(2005)、小林(2000)は、ASDの人のあり様を能力面の躓きのみならず、心の面での躓きに目を向けて理解する上で、重要な視点を提供する。しかし、浜田(1992)による仮説は、知的な遅れを伴うASDの人への観察から導かれている。一方鯨岡(2005)や小林(2000)の実践は、主に乳幼児を対象とする。このことから、知的な遅れを伴わないASDの成人への理解や支援を考える場合に、上述の仮説や実践を活用できるのか、吟味していく必要があるのではないかと考える。

(3) 先行研究の概観

ASDの人の自己の領域を扱った先行研究を概観し、本研究の目的をより明確にしたい。

まず、自己概念、自己理解について当事者による自己陳述という切り口から研究したものを概観する。Lee&Hobson(1998)は、言語表現可能なASDの青年12名に対して半構造化面接を行い、自己理解に関する7つの質問をした。その結果、対象群が自分を定義する際に他者を視野に入れているのに対して、ASD群は友人についてや対人的集団の成員であることについて言及した者はいなかった。よって、ASD群は対人関係面での自己理解が相対的に乏しいと考察している。野村・別府(2005)は、知的な遅れのないASDの小中学生に対し横断的調査を実施し、知的な遅れのないASDの小中学生は健常児より他者との関係における自己への言及が少ないという障害固有の特徴は持つが、中学生になるとそのことへの言及が増大するという発達的变化の側面をもつと考察している。滝吉・田中(2011)は、ASDの青年22名と定型発達者880名に対し、自己をどのように理解しているか質問した。定型群が他者との相互的なやりとりや

関係において自己を肯定的に捉える可能性が高いのに対し、ASDの青年は他者との相互的な関係性の中で自己を理解する場合に、自分自身のできなさや困難さを認識しやすく、自己を否定的に捉える可能性が高いと考察している。

これらの先行研究から、ASDの人は、他者との関係から自己を捉えることへの特異さ (Lee & Hobson, 1998) はあるが、それは年齢に伴って変化する可能性があること (野村・別府, 2005)、また、ASDの人は他者との関係の中で自己を理解しないのではなく、定型発達の人とは異なる内容の理解をしているという特徴 (滝吉・田中, 2011) があることがわかった。これらの結果を導いたデータは、研究者が、予め設定した枠組みで対象者の行動を細かく切り分け、その断片を定量的に測定することで得られたものである。部分部分としては細心の注意が払われ確かなデータを得ており、年齢による特徴もある程度明らかになっている。しかし、横断的データや数量化では、あれこれの思いをもって今を生きる一人の人の全体像 (鯨岡, 2007) を捉えることが難しいという課題が残されていると思われる。

次に、当事者の内的世界を捉えるために当事者の手記を分析した研究と当事者の語りを分析した研究を概観する。杉山ら (1998) は、知的な遅れを伴わないASDの青年8名に生い立ちの手記の執筆を依頼し、それを分析した。この研究が手記分析の先駆けとなった。佐藤・櫻井 (2010) は、Williams, D. (1992) の手記を分析することによって、ASDの人の自己内界に迫り、自己の特徴と自己概念獲得の様相を探索的に明らかにしようとした。それによると、自我境界が曖昧でさまざまな外的刺激が侵入しやすいこと、あるいは自分自身を外部に拡張しやすいこと、自己の身体イメージをもてないこと、変化の中で一貫した人格を保つことが困難である、といった特徴を抽出した。このような境界と統合の弱い自己感を基盤にしているために、対人関係の中で自己感や自己理解を得ようとすればするほど、自己喪失の危機につながってしまい、他者との関係の中で自己認知を深めていくことは非常に困難であるとする。しかし、このような困難の中で、自己が脅かされない対人距離を取りながら関わりをもつことや、一旦対人関係から離れ対物関係の中での安心感に戻るといった対処法を編み出していったことにも言及している。亀井ら (2011) は、出版されている4名の当事者による手記を分析し、知的な遅れを伴わないASDの人における自己理解の心理的プロセスの発達的变化とその特徴を導出した。その結果、幼児期より漠然と自他の違和感を抱いており、児童期に至っても他者との具体的な違いや原因は理解できないが、自分がいじめられているという認識ができるようになることで否定的な自己理解をするようになっていくとする。さらに思春期・青年期には、自他の違いをはっきりと認識しつつ、他者となんとか関わりをもつために本来の自分ではない自分で他者と関わろうとするなど、普通になろうと試みる。しかし他者から受け入れられないことに傷つき、自己を見失い、二次障害が生じているとする。また、分析をした4名全員が、自他の違いへの気づきから、「自分自身を理解したい」という強い思いをもつ特徴も見出され、診断によって「納得した、やっとみつけた」という思いを抱いている。その後4名それぞれが診断名を消化することに心を砕く経過があることと、自伝を記すことで人生を語り、自己の見方が肯定的に変化し、独自の自分を見出していくことを明らかにした。間宮・俵谷 (2011) は、成人期にASDと診断された3名を対象に半構造化面接を行い、診断前後における自己理解のあり様について検討した。3名の語りから、診断・告知によって自己の捉え直しができるようになったが、新たなおさまらない体験をしていることを明らかにした。また、平野 (2014) は、障害者手帳をもつASDの成人4名に半構造化面接を実施し、ASDの人が障害者手帳をもって生きる体験につ

いて調査した。その結果、障害者手帳をもって生きる体験は「葛藤を抱えつつ自分と社会の間に折り合いをつけながら生きること」であるとした。

間宮・俵谷(2011)、平野(2014)の研究は、当事者の内的世界の語りを聞き取り、分析することに成功している。こうした研究が成立した背景には、当事者による手記の流布、またASDの人への理解や支援の社会的な広まりから、当事者が自らの言葉で語れる土壌が徐々に醸成されてきた昨今の状況が関係していると考えられる。こうした状況を踏まえると、インタラクティブな対話を通し、当事者が抱えてきた「自分」の様相に焦点を当てて聞き取るインタビュー調査を行い、それを質的に分析することが今日の課題となっていると考える。独白の形で綴られた生い立ちの手記の分析に留まらず、当事者自身にも意識化されていなかった内的な意味世界を対話によって浮上させ、ASDの人が抱える「自分」の様相を明らかにし、さらなる理解と支援に役立つ成果を得ることが必要ではないだろうか。

上述してきたように、本研究は数量化や平均値化が意味をもたない研究領域である。よって分析方法としては、人間をできるだけトータルに捉えることができるGrounded Theory Approach(以下GTA)の選択が妥当と考える。さらに、GTAの特性を活かし、実践しやすい方法として提案されたModified Grounded Theory Approach(以下M-GTA)(木下, 1999, 2003, 2007, 2009)の選択を検討した。M-GTAは、限定された範囲内に関して、人間の行動の変化と多様性をプロセス性に着目し、一定程度説明できる理論を導くことのできる分析方法である。さらに、導出された理論内容のどの部分に働きかければ相手の行動がどう変化するか、という予測に役立てることができるため、ヒューマンサービス領域での実践的活用にも耐えうる分析方法とされる。これらの理由から、M-GTAが本研究に相応しいと判断した。

(4) 目的

本研究は、浜田(1992)、鯨岡(2005)、小林(2000)の理論仮説や実践を参考に、知的な遅れを伴わないASDの成人が抱える「自分」に焦点を当てる。先行する数量的研究、横断的研究では、あれこれの思いをもって今を生きる一人の人の全体像(鯨岡, 2007)を捉えることが難しいという課題が残される。当事者が自らの言葉で語れる土壌が徐々に醸成されてきた昨今の状況を踏まえ、インタラクティブな対話により生成された語りの分析を通し、当事者の内的な意味世界を、プロセス性に着目して描き出すことで、さらなる理解と支援に役立つ成果を導きたい。

よって、本研究の目的は、インタビューを通しASDと診断された成人当事者が抱えてきた「自分」、そして抱え続けていく「自分」というものを当事者の内的な意味世界に沿って捉え、ASDの人が抱える「自分」とはいかなるものなのか、M-GTAの手法を用いて個人の体験の多様性を一定程度説明するプロセスを見出す事である。

2. 研究方法

(1) 分析方法

本研究がM-GTAに適した研究であるかどうかについて、第一に、ASD当事者が、他者との関わりや診断を受けるという社会的相互作用を通し、いかなる「自分」を抱えつつ生活している

のかという経験内容を取り上げる研究である点、そして第二に、その経験内容の多様性と変化を一定程度説明する理論を導出することを目的とする研究である点、第三に、ASD当事者への理解と心理社会的援助を視野に置く臨床心理分野としての研究であること、以上3点において再度確認した。

M-GTAでは方法論的限定としてデータの範囲を制御し、その範囲内での分析を緻密に行う為、分析テーマと分析焦点者の2点から分析を進める。実際に得られたデータに密着し、分析を行いやすいところまで研究テーマを絞り込んだものを、分析テーマと呼ぶ。また、実際の対象者を抽象的に設定したものが分析焦点者である。本研究では、分析テーマを“成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセス”と定め、分析焦点者を“診断後数年を経た、知的な遅れを伴わないASDの成人”とした。

(2) 調査協力者

調査者(臨床心理士)は、調査当時、福祉の分野で発達障害の人の相談支援を行う立場を4年経験していた。調査協力者への依頼については、ASDの人が利用する福祉施設の職員、又は自助グループの窓口となる人の許可を得て、調査者が研究の目的と調査内容、プライバシーの保護に関する説明を行い、調査に関心を持った8名に協力を依頼した。また、講演活動を行う2名には直接依頼した(表1参照)。なお協力者は、10名中6名が大学卒業、2名は大学在学中、1名は専門学校卒業、1名は普通科高校卒業であった。詳しい知能指数等の提示は求めなかったが、インタビュー調査の際の言語的やりとりや生活上の様子から協力者は全員知的な遅れを伴わないと判断した。協力者は全員DSM-5の出版以前に専門の医療機関にて診断を受けているため、表1の調査協力者一覧には、診断当時の基準による診断名をそのまま記載した。

表1 調査協力者一覧

名称	年齢	性別	診断名	診断歴	インタビュー所要時間
A	40代後半	女性	特定不能広汎性発達障害	7年	167分
B	40代前半	男性	アスペルガー障害	6年	150分
C	30代後半	女性	広汎性発達障害	1年	166分
D	40代後半	女性	広汎性発達障害	3年	130分
E	20代後半	女性	アスペルガー障害	5年	155分
F	30代後半	女性	アスペルガー障害	8年	210分
G	30代後半	男性	アスペルガー障害	3年	168分
H	30代前半	女性	アスペルガー障害	3年	220分
I	30代前半	男性	アスペルガー障害	3年	238分
J	30代前半	男性	アスペルガー障害	5年	202分

(3) 倫理的配慮

調査協力者には、インタビュー調査の数週間前に、研究の概要とインタビューで質問する内容をまとめた資料(事前資料)を渡し、質問や不安が無いかを確認した。また、緊張や不安からインタビュー当日に質問にうまく応答できないのではないか等、協力者に予期不安が生じない様、事前資料にはインタビューの項目ごとにメモ欄を設け、思い出された事柄やエピソードを

書き込んで準備しておけるようにした。また、協力者の基礎的な情報(年齢・学歴・職歴・診断内容・診断された時期など)を基礎情報シートに事前に記入してもらい、インタビュー調査当日に持参してもらった。書きたくないことがあれば無理はしないよう伝えた。

調査当日、研究の目的や方法、倫理的配慮や論文化についての説明を書面および口頭で行い、同意書への署名を依頼した。プライバシー保護のため、インタビュー調査の内容を文字に起こしてデータ化する際、協力者が特定できるような名前やプロフィールについては、仮名もしくは加工を行って表示した。後日その内容を協力者自身に確認してもらった。

(4) 調査の手続き

調査は2012年7月～2013年2月にかけて実施した。当初、インタビュー調査の所要時間は一人60分～90分を予定していたが、同意を得て全ての協力者において延長した。一人あたりの平均は180分であった。延長された理由は、インタビューが「自分」を語る内容であり、多様なエピソードを通し調査者と語り合いながら探索するための時間を必要としたことと、協力者が語る言葉の背景を、調査者が共有する作業にもある程度の時間を要したためである。それぞれの所要時間の詳細は表1に記載した。調査は北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター内の部屋か、協力者が利用する福祉施設の一室を借用し、筆者が実施した。その際、録音とメモを取る承諾を得た。その録音をもとに逐語記録を後日作成し、協力者に確認してもらった後、分析の対象とした。調査時に筆者が取ったメモと、協力者本人によるメモ(事前資料)、また、協力者の執筆物、講演資料も分析の対象とした。

インタビュー・ガイドは、予備調査(論文投稿中)によって見出された以下5点である。

- ①これまでどのような「自分」を感じながら生活してきたか、どのような「自分」に悩んだり困ったりしてきたか。
- ②「自分」の良い面、好きな所をどのように感じているか。
- ③周囲の人(家族・親戚・友人・先生・先輩・同僚・上司・医師・支援者等)との関わりで心に残っている事とはどんなことか。
- ④診断名がわかる前後の様子について。
- ⑤同じ診断名をもつ仲間と会う事、語り合う事がもつ意味とは何か。

事前資料のメモ欄に書かれた本人の記述を手掛かりにインタビューを進めたが、基本的に話の文脈を重視した。以上5点についての話を終了した時点で、インタビューに協力しようと思った理由、話し終えてみての感想を追加した。

(5) 分析の手続き

分析は以下の手順に沿って行った。①一人分のデータに目を通す(最初に分析するデータは特にリッチなデータだと判断されるものを選択)、②分析テーマと分析焦点者を念頭に置き、最もリアリティをもって惹かれた部分を分析ワークシートの具体例の欄に取り出す、③分析焦点者の目線を通し、その部分に着目した理由とその意味を解釈する、④解釈した内容を簡潔な文章で定義欄に記入する、⑤定義をさらに凝縮し、概念名の欄に書く、⑥他に具体例がないか2例目以後も見えていき、具体例が追加される中で定義や概念名を修正し最適化する。手順の中で、似た内容の概念が生成されている場合は統合し、具体例が多くある場合は、再検討し幾つかの概念に分けた。概念と他の概念との関係を検討し、カテゴリーを生成した。概念やカテ

ゴリー間の関係、プロセスの動きに着目しながら結果図を作成した。最終的に、データから新たな概念が生成されなくなり、分析結果が分析焦点者から解釈され、分析テーマに対応しているか、データの範囲と分析結果が最適なバランスにあるか、という確認において理論的飽和に至ったかの判断を下した。

結果の妥当性確保に関しては、北海道M-GTA研究会での検討を4回と、M-GTAに詳しい分析スーパーバイザー2名からのスーパーバイズを1回ずつ受けた。また、所属する大学院の研究グループゼミ内において2回検討した。さらに、最終的な分析結果を、直接会う機会を得た調査協力者4名に説明した他、ASDの人の支援経験がある保健師と心理士2名から感想を聞いた。調査対象者からの感想は、全体として結果を受け入れることができるというものであり、特に〈苦悶のサイクル〉に戻っていくプロセスにリアリティを感じる、といった思いが聞かれた。保健師からは、〈調整のサイクル〉は支援のヒントが得られるプロセスだ、との感想が得られ、心理士からは、当事者の断片的な語りの理解に戸惑っていたが、結果図のプロセスをイメージすることで断片が線で繋がっていくように感じられた、との感想が聞かれた。

3. 結果と考察

M-GTAはその分析方法の特徴から、データがもつ意味の解釈が中心となる。そのため、以下結果と考察をあわせて記述する。分析の結果、25概念、6サブカテゴリー、5カテゴリーが生成された。全体像としてのストーリーラインを記述した後、カテゴリーごとにプロセスの様相を詳述する。さらに、図1にカテゴリー間、概念間の関連をまとめた結果図を示す。表2にカテゴリー名とサブカテゴリー名、概念名とその定義、そして各概念に含まれる具体例の一部を示す。以下具体例からの引用は文字を斜体とし「」で括って示す。…は文章の省略を意味し、()内の事例名称は表1の名称と対応させた。なお、カテゴリーは〈〉、サブカテゴリーは[]、概念は『 』と記す。

ストーリーライン

成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセスは、[おぼろげな自分]を〈抱えてきた自分〉が、なんとか他者と関わって生きようとする中で動き出していた。彼らは、『身体の訴えをきき流す』ことで〈苦悶のサイクル〉を巡り、『身体の訴えをきき入れる』ことで〈調整のサイクル〉へと転じ、〈人の中で生きられる自分の形を探す〉試みへと導かれていた。しかし、『人の中で生きよう』とするゆえに、再び『“できなさ”の中に自分を垣間見る』こととなり、〈苦悶のサイクル〉に戻っていつてしまうこともある。こうした行きつ戻りつの巡りの中で、ASDの人の「自分」を尋ね出すプロセスは続いていた。

(1) 〈抱えてきた自分〉

このカテゴリーは、ASDの人がどのような自分を抱えて生活をしてきたかを説明している。彼らは、[自分と繋がりにくい]という面と、[他者と繋がりにくい]という面が作用し合って生ずる[おぼろげな自分]を抱えつつ生活してきたということがわかった。

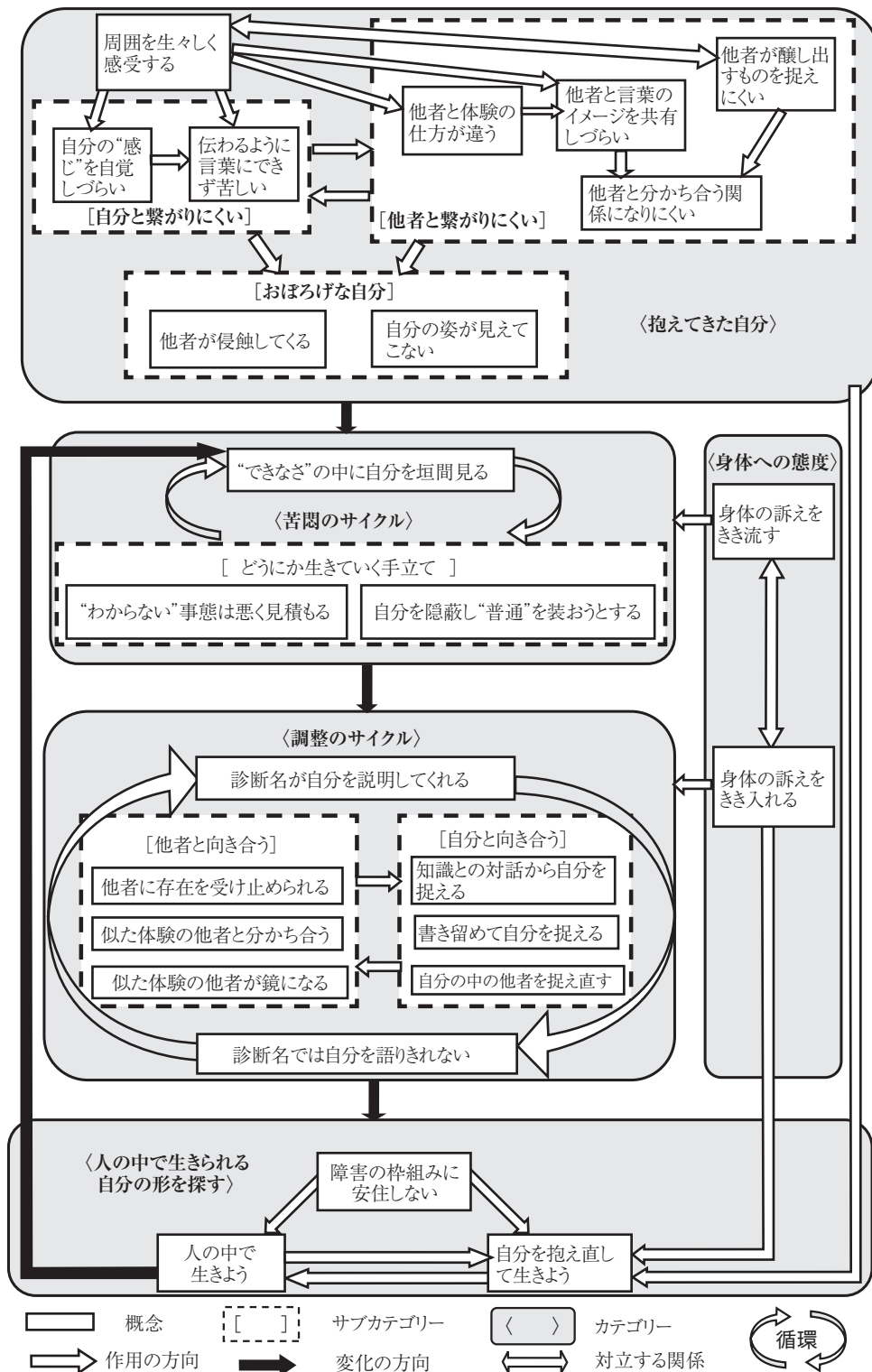


図1 結果図 成人後にASDと診断された人が尋ね出していくプロセス

表2 カテゴリー・概念一覧

カテゴリー名	サブカテゴリー名	概念名	定義	具体例
抱えてきた自分	自分と繋がりにくい	周囲を生々しく感受する	周囲の生々しい印象が感覚の中に押し寄せてくるように感じる	喋ってない何か、まとっているものとか含めて、目付きだったり、声のトーンだったり、いろんなものがワッてくるんですよ(A)
		自分の“感じ”を自覚しづらい	その時々自分の気持ちや状態をタイムリーに自覚するのが難しい	なんて答えていいのかわかんなく言ってしまった答えが、全然心に思っているのと違う。後々よく考えると違うんですよね(A)
		伝わる様に言葉にできず苦しい	他者に自分を理解してもらえるように言葉で表現することができずに悩んだり苦しんだりする	喋りたいんだとは思う。でもそれがうまく言葉に表現する、適切に自分の感情とかを表す言葉がうまく見つからなかったりとかで…ああなんか言えなかったとか、後から思ったりとか、すごいあるんですよ(C)
	他者と繋がりにくい	他者と体験の仕方が違う	周りの人の物事の感じ方や捉え方が自分とは違うことに違和感を持つ	なんかずれてる。私の見え方、感じ方と周りがずれてるっていう事がすごくずっと居心地が悪かった…(D)
		他者と言葉のイメージを共有しづらい	他者と言葉のイメージを共有しづらいためにその場で理解を共有していくことが難しい	体験による思考なので、ほとんどが。つまり相手と自分の体験の誤差が大きい程言葉が伝わりづらくなるので(I)
		他者が醸し出すものを捉えにくい	表情や醸し出される雰囲気から他者の気持ちを推測しづらい	はっきり言葉にならないものがわからないんです。雰囲気とかでつかむんだと思うんですよね。多くの人って。まずその雰囲気がつかめなから…(J)
		他者と分かち合う関係になりにくい	他者と考えや思いの脈絡を理解しあったり、共有したり、分かち合ったりする関係になっていくことが難しい	自分からしてみたら、多分そういう人達は分かっている振りをしているんだろうと思う。なので自分はその輪の中に入りたくないと思うんだと思う(B)
	おぼろげな自分	他者が浸蝕してくる	他者と共にある中で主張ができなかったり、相手に合わせる対応をする中で、自分が他者に侵蝕されて、無くなってしまうような不安や不快を感じる	だんだん私を取り込めそうだと思ってしまわらしいんですよ。個が薄いので。話し合ってる時に、個人の個が抜けていって、私の我が置いてきぼりで話すからだんだん乗っ取り感、パワーゲームみたいなのが生じてしまひやすくて。向こうのせいじゃなくて私のせいなんですけど。信頼してる人でも油断するとそういうことが起こるので(F)
		自分の姿が見えてこない	自分がどのような存在なのか分からないという不安を抱える	ずっと宇宙人みたいな、人間の皮被った宇宙人じゃないかなって、自分がわからなかったんですけど(D)
苦悶のサイクル	どうにか生きていく手立て	“できなさ”の中に自分を垣間見る	おぼろげな自分を抱える中で、他者と比較してできないことや求められる事ができないことで自分を認識していく	自分はおかしい。やばいと思いましたね。なんか変なふうに生まれてきたんじゃないかなろうかと思いましたね。…もしかしたら知恵遅れの類なんじゃないかと思う位怖くなりましたね。もしくは、精神病って言葉は知らなかったけど、いわゆるキチガイっていう存在、おかしくて悪い人間なんじゃないだろうか(C)
		“わからない”事態は悪く見積もる	他者の思考のつかめなさ、状況の曖昧さを、他者を敵視したり、他者からの反応を悲観的に捉えたり、自分流の想像でつなぎ合わせることでなんとか理解し、対処しようとする	だから悪い方に考えるようにしてる。もしかしたら私がした事で不機嫌になってるのかって。動作とか見たものの情報、表情。表れなかったら、悪い方に捉える(C)
		自分を隠蔽し“普通”を装おうとする	多くの人と同じように振舞うことで、できないことがある自分を自分自身にも、他者にも隠蔽し、なんとか生きていこうとする	高校3年生位までは自分を演じている方がずっと強かったです。…だけどそうしないと生きていけないって感じですね(J)

身体への態度	身体への訴えをきき流す	身体から不調のサインが出ていても、それを無視してやり続けてしまう	けっこう身体にも出てみたいですけど。不登校になるまではならなくて、学校にはいかななくてはいけないもんだという刷り込みもあったし。どんなに体調悪くても体まないというのがあって(A)
	身体への訴えをきき入れる	身体的な訴えに向き合う事が生活を変化させる契機になる	記憶があんまり。拘束時間が長かったんで、フラフラになりながらやってて。あるときは幽体離脱状態になって。上から自分見てみたいになって。これもうやばいってなって(E)
調整のサイクル	他者と向き合う	診断名が自分を説明してくれる	発達障害って言われれば、それ向けの本とかも出てるし、発達障害に合わせた対策も打てるし、何より自分が今まで生きてて、よくわからない理由の混乱が整ったことで、これでちょっと生きていけるんじゃないかって。自分が何者かやっとな分かったって感じ(F)
		診断名では自分を語りきれない	診断名とかがついた時に本を読んだんですが、ここに自分は居ないと思いました。俺の事が書かれてるのではなくて、定型化されている(I)
		他者に存在を受け止められる	KDrが居て僕が居てということだと、何か戦略がちよっと違ったりとか、気持ちがちよっとかしましたね。言ってることもやってる事も全然変わらなかったんですけど。でも何か確実に違いました(I)
	似た体験の他者と分かち合う	似た体験を持つ他者と出会い、思いや考えを分かち合うことで自分を確かめていく	人ごみに行くとき、音とかでパニックになっちゃうよねとか、感覚的な部分とか、こういう素材苦手よねとか、なんかそういう話とか、対人関係でこういうことわかんなくなるよねとか、こういう言葉ってわかんないよねとか…本当に理屈じゃない部分のそうそうみたいなの(E)
		似た体験の他者が鏡になる	仲間連中を見てると強く感じます。全然皆の話聞いてないで、キーワード反応みたいにそこだけ反応して話し出して(笑)文脈があるから、そこだけ入ってきててもみたいな。それは話聞いてもらえないだろうって。でも俺も一緒だなんて。そういうの見てたら勉強になるんですよ(I)
	自分と向き合う	知識との対話から自分を捉える	人は変化するんですけど、本は記録なので、その人が後々変化したとしても、その時の気持ちは変わらないじゃないですか。だから固定されたその人を何回も反芻することができるので…そういう記録物とかだと考えを整理しやすい。…触れやすいって言ったらいいんですかね(I)
		書き留めて自分を捉える	なんでも思ったこととか書き留める癖があるんですけど、そうしておかないとその時思ったことは二度と思い出さないかもしれないとか、自分で何なんだろうということをどっかに記しておきたいのかな(A)
		自分の中の他者を捉え直す	だれも悪くないんだって思ったから。父親が悪かったわけじゃないし、私も悪くないなら、じゃあいいやって。しょうがなかったんだし…(C)
人の中で生きられる自分の形を探す	障害の枠組みに安住しない	障害の枠組みの中に安住しすぎて、自分として生きていける可能性を狭めたくないという思い	ま、障害なんだから仕方ないよねって、他から言われる分には仕方ないけど、自分がそういう風に思っちゃったら、もう絶対にここから抜け出すように自分の考えを修正するっていうのはもう不可能な段階なんだろうなと…(B)
	人の中で生きよう	自分の課題と向き合いつつ、社会に位置づいて生きて行くことを志向したり、社会の中で自分の役割を見出そうとしたりと、人の中で生きようと模索し続ける	生きていく上で私はこういう特性だけど孤立して、自分だけで切り開いて生きていくなんて思ってたんで、やっぱりこの社会の中で所属して生きていくってやっぱり思っているの…(H)
	自分を抱え直して生きよう	自分の特徴を受け入れたら、諦めたりしつつ、そういう自分を自分で抱えて生きていこうという姿勢を持つ	適応できない、規格に合わない自分、集団に馴染めない部分と、自分で自分が好きという部分が一緒だと思うんで、なんとかそれを分離させないのかな。自分の中であんまり矛盾をつくらないようとかいうか、そういう生き方を模索していけたらなあって(A)

サブカテゴリー「自分と繋がりにくい」は、『自分の“感じ”を自覚しづらい』ことで『伝わるように言葉にできず苦しい』との思いを抱いていく動きからなる。「…これが嬉しいのか悲しいのか怒りなのか、何なのか、その詳細がわかりづらいということがあったりして…私やっぱり悲しいっていう気持ちを自覚するのが苦手で…(H)」,「苦しい時も、自分の中でそれを認識する方法や、外に表現する方法を持っていないのかもしれない、何故か苦しく辛く感じた。(F)」という具体例には、その時々自分の気持ちや状態をタイムリーに自覚することが難しい様子が表れる。そして「喋りたいんだと思う。でもそれがうまく言葉に表現する、適切に自分の感情とかを表す言葉がうまく見つからなかったりとかで、それでやっぱり、しゃべりたいんだけど、ああなんか言えなかったとか、後から思ったりとか、すごいあるんですよ。(C)」,「しゃべれないんで、何か訴える時は泣くしかないんですよ。(E)」等の具体例からは、『自分の“感じ”を自覚しづらい』という難しさを根本にもち、さらに他者に伝わる言葉にして表現することができない、という二重の苦しさの中を生活する姿が浮かび上がった。

サブカテゴリー「他者と繋がりにくい」は、『他者と体験の仕方が違う』ことで『他者と言葉のイメージを共有しづらい』ために『他者と分かち合う関係になりにくい』という動きと、『他者が醸し出すものを捉えにくい』ために『他者と分かち合う関係になりにくい』という動きからなる。「周りが楽しそうにしているのも分かんないし、嫌だなんて思いながらずうっといて…(A)」,「体験による思考なので、ほとんどが。つまり相手と自分の体験の誤差が大きい程言葉が伝わりづらくなる…(I)」と、他者と体験の仕方に違いがあり、そのため言葉からイメージすることにも違いが生ずるとの語りが得られた。また、「難しい。感じ取れない。感情もわからない。自分の感情も相手の感情もわからない。わからないし、わかってくれと言われるのも不安。(G)」と、他者が醸し出す雰囲気からその気持ちを察することに困難を抱える様子がわかる。そして「周りの人が当たり前のように、言葉で自分を表現し、互いの心を共有出来るのが不思議で少し悲しい。(E)」,「どんなに人としゃべっていてもさびしい感じ。(G)」と、他者と「自分」との間で、考えや思いの脈絡を理解し合ったり共有するという、分かち合う関係が築かれていかない。

サブカテゴリー「おぼろげな自分」は、『他者が侵蝕してくる』,『自分の姿が見えてこない』という概念からなる。「自分が0で相手が100になっちゃう…話しててあんまり自分の意見を言わなくなっちゃうから、その人を丸のみしちゃって、その人になっちゃうから。(H)」,「境界線が曖昧っていうのがあって、この人は今これを望んでいるのかって思うとそういう行動をしてしまうとか。後々よく考えたらしたくなかったなっていう。その場で分かんないんですよ。だから、なんか、相手の思っていることが私の思っていることかな？みたいな(笑)(A)」と、他者と自分の関係性の認識が混乱したり、主張ができないことで他者が「自分」を侵蝕してくるという不安を抱えている。また、「誰にも影響を受けないし、誰にも影響を与えないとしか感じていないので…自分がそこにも疎外感を感じているし、向こうが自分をどう考えているかっていうのはわからないわけだから、そこで自分が何か言ったところで何か変わるとかっていうのも感じたことがない。(G)」と、他者と共にある中で「自分」がどのような存在なのかかわからない、『自分の姿が見えてこない』という不安を抱えていることがわかった。

『周囲を生々しく感受する』という概念は、どのサブカテゴリーにも属さず独立している。「説明が難しいんですけど、話していてその人の気分がブーンと感じてしまって。口で言っていることと矛盾があったりするわけですよ。でもその後ろにあるものをすごい感じる。言葉

は言葉でしかなくて、でもその人が思ってることは違うよねっていうのをブワッと受け取るんですね。…にじみ出てくるようなこう、憎々しさとか、そういうエネルギーというか…負と言われるような感情、憎んでる感情やよわよわしい人。頑張ってるけどすごく弱いの無理しちゃってないかなって人だと不安になりますし…(D)、「やっぱり引きづられちゃうんでしょかね。しゃべった人のカラーみたいなものに。多くなればなるほどこう雑多な色になっちゃって影響を受けすぎちゃうっていうのか…喋ってない何か、まとっているものとか含めて、目付きだったり、声のトーンだったり、いろんなものがワーツてくるんですよ。…特に強い人は刺さるみたいに感じるし、そうすると弱い人のは微弱になっていて…ついていけなくなったりとか…本当に意見言いなさいって言われても出でこないんですよ。(A)」という具体例が得られた。この概念は、これまで述べてきた様々な概念に影響している。Dさんが「説明が難しい」、「ブワッと受け取る」と表現し、Aさんが「引きづられちゃう」、「影響を受けすぎちゃう」と表現するように、外界から溢れんばかりの情報を感受することで、内界からの『自分の“感じ”を自覚しづらい』こと、また、言葉にし難い感覚であるため『伝わるように言葉にできず苦しい』ことに影響する。さらに、その特徴は『他者と体験の仕方が違う』ということや、『他者と言葉のイメージを共有しづらい』事にも影響する。しかし、『他者が醸し出すものが捉えにくい』こととは対立した関係と言える。具体例では、口で言っている事の「その後ろにあるもの」、「喋ってない何か、まとっているものとか含めて」を受け取るということから、他者が意図的に表出するものではないものを生々しく感受しているようだ。一方で、「自然の中にいたりすると、一体感を自分はこう勝手に感じてしまうとか。…風に吹かれているとか…海の波を受けているとかっていうときは、全部肯定されているって感じるんで。やー生きて良かったって…(A)」と、自然と「自分」との間に垣根がないような、瑞々しい印象を感受する側面も語られた。このことをAさんは、「それがもし全部切られた状態に生きてたら、すんごいづらいと思います。(A)」と語り、「自分」の大切な特徴と位置づけている一面があることもわかった。

(2)〈苦悶のサイクル〉

このカテゴリーは、ASDの人が、[おぼろげな自分]を抱えながらも何とか他者と関わって生きようと模索する苦しさを説明している。彼らは [おぼろげな自分]を抱えながら、『“できなさ”の中に自分を垣間見る』ことで、[どうにか生きていく手立て]をとろうとする。しかし、その努力が返って『“できなさ”の中に自分を垣間見る』苦しさを再燃させてしまう。

『“できなさ”の中に自分を垣間見る』には次の語りが含まれる。「中学校に入ると自分は本当に変なんじゃないかと。…一気に外からの反応もあったので。…おまえ空気読めねえな、今この話してるのにつて担任に言われたりとか。…自分はおかしい。やばいと思いましたね。なんか変なふうに生まれてきたんじゃないかなろうかと…もしかしたら知恵遅れの類なんじゃないかと思う位怖くなりましたね。…いわゆるキチガイっていう存在、おかしくて悪い人間なんじゃないだろうかと…(F)」と、[おぼろげな自分]を抱える中で、他者と比較してできないことや、求められることにうまく反応できないといった、“できなさ”を目の当たりにすることで「自分」を認識していく。

サブカテゴリー[どうにか生きていく手立て]は、『自分を隠蔽し“普通”を装おうとする』と『「わからない」事態は悪く見積もる』という概念からなる。「高校3年生位までは自分を演じて

いる方がずっと強かったです。…そうしないと生きていけないって感じですね。…(優等生を演じることで)模範のJくんなんだけど、そんな自分が誇らしいとかとは全然思いませんでしたね…自己評価も限りなく低いですね。…やっぱり自分を表現できないっていうのがずっとネックでしたね…ダメな自分って感じてましたね。(J)」と、自分を隠蔽し優等生を演ずることで「どうにか生きていく手立て」を講ずるものの、自分を表現できないという“できなさ”を感じ続けるというサイクルが語られた。さらに、「わざわざ誰も気づいていないのに謝ってもうぜえなと思われるかもとか、ビクビクしているうちにしゃべれなくなったりしてって。(F)」と、他者と「自分」との関係が見えず、『「わからない」事態は悪く見積もる』ことで、失敗を予防しようとする。しかしそうした手立てが返って自分を苦しめる循環を作り出してしまう。

この〈苦悶のサイクル〉を巡り続ける中で、「自分の頑張りはどの辺でいいのかというのが、全然判断つかなかったんですよね。…頑張れば普通になるんじゃないかなって…(A)」、「今の元々の自分のままでは社会的には生きていけないから、世の中で普通には生きていけないから、普通の人聞めさそうって…(D)」と、生きていくために“普通”になる努力が続けられていく。そして、「それしか世界があることが分からなかったの、それから外れたら自分はもしかしたら生きていけないかもしれないという…恐さでした。(I)」と、“普通”の生き方を目指す努力をやめてしまえば、生きていく術を失ってしまうのではないか、という恐れの中で、必死で苦しさに耐える姿が浮かび上がった。

(3)〈身体への態度〉

このカテゴリーは、『身体の訴えをきき流す』と『身体の訴えをきき入れる』という対立する二つの概念から構成される。『身体の訴えをきき流す』ことで前述の〈苦悶のサイクル〉を巡り、『身体の訴えをきき入れる』ことで〈調整のサイクル〉に転じていく様相を説明している。

「けっこう身体にも出てみたいですけど。不登校になるまではなくて、学校にはいかなくてもいけないもんだという刷り込みもあったし。どんなに体調悪くても休まないというのがあって。(A)」、「基本的には人と接するのは苦手だし、集団が苦手なのに、どんどん人の中に入っていきたいって、ワーツてこうなっちゃって。だけど自分はもれなく疲れていて。だけどその疲れを自覚できないような状態で。気づいた時には摂食障害になっていたという状態で。(H)」と、体調の悪さや疲労感という身体からの訴えはありつつも、それをきき流すことで〈苦悶のサイクル〉を巡り続けていく様子が語られた。

こうした巡りの中で、『身体の訴えをきき入れる』という体験がこのサイクルを離脱する契機となっている。例えば、「死ななきゃ止まらなかったんですよね。だから自分の身体から出てきたもう死ぬよっていうサインが摂食障害で。死ぬか、そこで止まれるかっていう、ギリギリの所でまあ私は死なずに止まれたっていう事だと思いますけど。(H)」と、限界ギリギリでようやく身体の訴えをきき入れたという語りや、「誰にも相談ができなくて、一人で抱え込んで、うつみたいな感じになっちゃって、みかねた上司からしばらく休みなさいってことになっちゃった。(うつはどんな形で出たんですか?)」身体に出てたと思いますね。眠れないタイプですね。(J)」と、他者からの助言によって自らの身体の状態を省みる事になったという語りがあった。そして、「病院のICUに何日か。目が覚めなかったのかな。目が覚めたら人工呼吸器つけてしゃべれないし、管がいっぱいついてるし(笑)ああ、生きてるって(笑)…もう大量服薬は死ねないんだなって。(C)」と、生きようとする身体からの訴えに向き合ったとい

う語りもあった。このように、身体からの訴えの内容は様々であり、きき入れ方もまた多様である。しかし、いずれも本人の意思を越えた身体からの訴えがプロセスを動かす動因となっていた。

(4)〈調整のサイクル〉

このカテゴリーは、『身体からの訴えをきき入れる』ことによって、〈苦悶のサイクル〉から離脱し、他者との関わりの中で「自分」を尋ね出すプロセスが動いていく様相を説明している。『診断名が自分を説明してくれる』という安堵感が「他者と向き合う」ことや「自分と向き合う」ことを支える一方で、『診断名では自分を語りきれない』という満たされなさも同時に抱えていく。

『診断名が自分を説明してくれる』は、例えば、「これなんだと、うまくいかなかったのはこれなんだと答えが出た感じでした。(J)」、「なんだ私だけじゃなくて、少数のグループでいるんだって、その中の1パターンなんだってわかったらすごく安心したんですね。(D)」と、診断名を与えられるという出来事が、うまくいかなかったこれまでの「自分」や、「自分」が何者なのかわからない不安への説明となり、安堵をもたらす大きな出来事となっている。また、「完全一致じゃないんだけど、うん…やっぱりそういう風(障害がある様)に、一見すると見られないから。まあ見られないように生きてきたけど。見られないからこそ困る。理解されるわけじゃないから。それを理解してもらうのに、それ(療育手帳)があると助かるっていう。(C)」と、他者に「自分」を理解してもらうために療育手帳が助けになることを示す具体例がある。この具体例には、「完全一致じゃないんだけど」と、療育手帳で「自分」をすべて語りきることはできないという思いが同時に表現され、『診断名が自分を説明してくれる』と『診断名では自分を語りきれない』という思いが並び立っていることを示している。

サブカテゴリー「他者と向き合う」は、『他者に存在を受け止められる』、『似た体験の他者と分かち合う』、『似た体験の他者が鏡になる』から成る。「診断名とかがついた時に本を読んだんですが、ここに自分は居ないと思いました。俺の事が書かれてるのではなくて、定型化されている。(I)」と感じ、『診断名では自分を語りきれない』と感じていたIさんだったが、「一緒に頑張りましょうねとか、こういう可能性ありますよとか。…KDrが居て僕が居てということだと、何か戦略がちよっと違ったりとか、気持ちが違ったりとかしましたね。…何か確実に違いました。(I)」と、他者が「自分」に向けて、一緒に取り組もうと言ってくれることは、「自分」の存在をしっかりと受け止められる体験となり、前向きな力を生んでいる。また、「人ごみに行くとき、音とかでパニックになっちゃうよねとか…こういう素材苦手だよとか、対人関係でこういうことわかんなくなるよねとか、こういう言葉ってわかんないよねとか…本当に理屈じゃない部分のそうそう!みたいな。(H)」、「当事者同士でそういう特性ってあるよね、そういう苦労ってよくわかるよって話をして自分を受け止めて貰ったときに、理解してもらったからこそ、相手を理解したいって思えるようになったし、理解したいって思えることで、理解する努力をできるようになった。(H)」と、思いや考えを分かち合える他者との出会いが「自分」を変化させる大きなきっかけとなっている。さらに、「当事者会とかに出ると、なるほど、この態度では就職は無理だというのがもう見えてくるんですね。(B)」、「僕も彼みたいな時期はあったと思います。…悪気はないんですよ。僕も一緒に活動してる仲間に不愉快な思いをさせたことがあったので…(J)」等の語りは、似た体験を持つ他者の言動によって「自分」の姿が照らし返され、「自分」を振り返るきっかけをもたらしている例である。

サブカテゴリー[自分と向き合う]は、『知識との対話から自分を捉える』、『書き留めて自分を捉える』、『自分の中の他者を捉え直す』から成る。「人は変化するんですけど、本は記録なので…だから固定されたその人を何回も反芻することができるので、考え方変わっちゃったからってならないんですよね。…そういう記録物とかだと考えを整理しやすい。…触れやすいって言ったらいいいんですかね。(I)」と、まとまりをもった知識との対話から、「自分」を捉えようとしている。また、「診断を受けて来年で3年なんですけど、それ以来ノートを作っていて。混乱しやすいし、頭を整理するのってすごく苦手なので…読み返してわかることもあるし、書きながら気づいていく。…混乱を防ぐ自分の、なんだろう一つの守る方法なのかもしれない。(H)」と、書いて文字にして見る作業によって、「自分」の思いや考えを整理して生活しようとしている。そして、「その時その時、周りの人間もだれも悪気もなく、結果としてそうになってしまって、みんな一生懸命生きてたんだよなって。学校でいじめる子がいたとしても、その子も一生懸命生きるためにそういう反応になっていたんだよなっていう事であったり。まあ、子ども(自分)に手を掛けられなかった両親にしても、好きでそうだったわけじゃないんだよなって。(D)」と、『自分の中の他者を捉え直す』内的な作業を行なっている。

こうして、[他者と向き合う]また、[自分と向き合う]作業を積み重ねながら、「自分」を尋ねる〈調整のサイクル〉は巡っていく。その巡りの中で、「グループワークで話してて、あるときふっと気づいたんですけど、AS(アスペルガー障害)の自分って思い過ぎてた。…診断から2年位経って…自分が上じゃんで。自分があってASがあることに気づいて。それから結構AS観としては楽になりましたね。それAS関係ないじゃんとか。この症状はASじゃなくてもあるって…(F)」という語りが示された。診断名によって自分を語り、また語り尽くした所で、改めて「自分」が主体なのだということに思い至っている。

(5)〈人の中で生きられる自分の形を探す〉

〈調整のサイクル〉を巡る循環から『障害の枠組みに安住しない』との思いを抱き始め、〈抱えてきた自分〉をもう一度抱え直すことが、受容と諦めと決心とをないまぜにした『自分を抱え直して生きよう』という姿勢や、『人の中で生きよう』という姿勢に表れてくる。

『障害の枠組みに安住しない』の具体例を3つあげる。「よくわからなかったからこそやっちゃってたことが、発達障害だからそうなるってことがわかったら、それを言い訳にはもうできないって、私思っ。原因がわかったから、そこに甘んじないで頑張らなきゃって思っ。たんですよね。それが診断を受けたことの責任だと思っ。(H)」、「障害者だから仕方がないやって考えに陥る人たちがいて。うん、やっぱりそれは嫌だぞっていうのはあるのかな。デイケアなり就労支援なり施設の中に入るとね、これ自分が人間扱いされてないなって、そういう風に思う瞬間が何度かあつ。ま、障害なんだから仕方がないよねって、他から言われる分には仕方がないけど、自分がそういう風に思っちゃったら、もう絶対にここから抜け出すように自分の考えを修正するっていうのはもう不可能な段階なんだろうなというところで。まあ、せいぜい人から言われている程度の範囲で踏みとどまって…(B)」、「全部受け入れてしまえば楽ですそれは。楽だけでも、それは自分は、あのー普通にやっていく手段を否定したのと考えから。自分としてはできるところから、あのー普通に振る舞っていいながらも、自分はASだということを認められるバランスのとれた範囲を探してる。(G)」これらの語りは、障害の枠組みの中に安住しすぎて「自分」として生きていける可能性を自ら狭めてしまい

たくなは、という強い思いが育まれていくことを示している。

こうして、「自分」として生きていくことを模索する中で、『自分を抱え直して生きよう』という思いが生じてくる。例えば、「いい子じゃない自分というか、適応できない、規格に合わない自分、集団に馴染めない部分と、自分で自分が好きという部分が一緒だと思うんで、なんとかそれを分離させないというのかな。自分の中であんまり矛盾をつくらないようにというか、そういう生き方を模索していけたらなあって、今の段階では思っています。(A)」、「普通になって、普通で感覚で思いっきり普通らしいことをやってみたい。普通じゃない状態で普通っぽいことやって、やっぱり無理あってできなかったから。普通で、普通に悩んだりとか、楽しんだりとかっていう人生を歩んでみたかった。だから、うらやましい。うん。でもこうやって生まれてきたことにも意味があるのかもしれないし、みんなにはできない経験をしてるのかもしれないし、まあまあ。比べてもしょうがないし、いいやと思って、みんなみたいにならなくても。我が道を行くで。こんな自分をおもしろいって言ってくれる人もいるし、いいかなって。(C)」、「一人になる時間が大事ですね。多分人と一緒にいるのも楽しかったりするんですけど、疲れるので。好きだからと言って出来る事と出来ないことがあって。私は制限しなきゃいけないんだなあ。積極的に制限しつつなんだろうっていう風に。(D)」という具体例がある。Aさんは、抱えてきた「自分」の特徴に扱いが難しい側面があることをよく理解しつつも、その特徴が好きだという思いも同時に持つことができるようになっており、そうした「自分」をもう一度抱え直すやり方を模索している。Cさんは、「普通」をうらやむ気持ちを赤裸々に語りながらも、「みんなにはできない経験をしている」、「比べてもしょうがない」、「こんな自分をおもしろいと言ってくれる人もいる」と「自分」に言い聞かせるようにしながら「我が道」を探している。Dさんには、人といると楽しいけれど「疲れる」という特徴があるため、好きなことでも制限しながらやっていく必要があることを語っている。疲れの自覚という、『身体への訴えをきき入れる』ことを通して、「自分」の生活を調整しようとする語りから、『自分を抱え直して生きよう』という姿勢と〈身体への態度〉とが連関していることがわかる。

「自分」として生きていくことを模索する中で、もう一つ浮かび上がった概念が『人の中で生きよう』である。「最低でもコミュニケーション能力は、最低でも人間として持っていないとではないから…コミュニケーションをとるためには、自分が喋って、相手が喋ったことに対して反応を返してくれるっていう環境を、もうできるだけ多く作ることが大事だと思っているんですけど。(G)」と、他者と生きようとする努力が語られたり、「人と距離を縮めないようにしています。私の領域にはよほど大丈夫な人しか入れない。(F)」と、「自分」が苦しくならず他者と生きられる様、距離の取り方を工夫する語りがあった。そして、「職場に障害をOPENにするかCLOSEにするかという選択肢があるんですけど、僕はもうOPENでいこうと最初から決めていたんですよ…生きるためについて感じですね。(J)」と、「自分」の特徴を隠さず他者に伝えることで『人の中で生きよう』とする姿があった。このように、人の中でいかにして生きるかは多様な内容を含むが、「自分」として生きていく形をそれぞれが探していることがわかった。

こうした『人の中で生きよう』とする試みの中で、「なんかみんなわかってる風だし。こん中で私わかってないって。やっぱり理解力とか、聴き取りがうまくできないなって思って。そっからダメだってまた始まって…(C)」と、ひと度他者との比較の中で「自分」を捉え始めると、再び『“できなさ”の中に自分を垣間見る』事となり、〈苦悶のサイクル〉の中に滑り込んで

いってしまうという語りも示された。「フラットに生活するのが難しい時があって。うつから復活するような薬ってなにか検討してもらえませんか(主治医に)言った時に、それは頑張る事をどんどん進める事になって危険じゃないかなって…それは納得だったんですけどね。改めて普通に憧れていたことに気がついて、長い間普通を目指して生きてきたんで、できる事なら普通になりたいんですよね。(D)」と、身体の訴えをきき流そうとした所を、『身体の訴えをきき入れる』よう他者から忠告され、納得しつつも、「できるなら普通になりたい」との思いを断ち切れないでいるという語りも示された。

このように、自らの身体に尋ね、診断名に尋ね、他者に尋ねながら成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセスは続いていた。

4. 総合考察

(1)〈抱えてきた自分〉

①『周囲を生々しく感受する』ことと「自分と繋がりにくい」ということ

本研究で生成された『周囲を生々しく感受する』という概念は、小林(1999)がASDの人の内的世界を理解する上で重視する、原初的知覚様態の継続という特徴と重なる。生々しい知覚が意識全体を満たし、その感覚と「自分」とが分離せず一体となって押し寄せてくるために、『自分の“感じ”を自覚しづらい』状態となることが考えられる。また、二者関係において意味づけられたり、共有されてこなかった知覚体験や情動は概念化や言語化がなされないままとなり、『伝わるように言葉にできず苦しい』という体験を生じさせているのではないか。他者に伝わる言葉を獲得できないからこそ『自分の“感じ”を自覚しづらい』という理解もできるかもしれない。このように、『周囲を生々しく感受する』という、原初的知覚様態の継続は、ASDの人の「自分と繋がりにくい」という特徴に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

②「他者と繋がりにくい」ということと情動コミュニケーションの躓き

「他者と繋がりにくい」というカテゴリーが示す意味を考察するため、このことを、情動コミュニケーション(小林, 2000)の躓きという観点から捉えてみる。「周りの人が当たり前の様に言葉で自分を表現し、互いの心を共有出来るのが不思議で少し悲しい。(E)」,「どんなに人としゃべっていてもさびしい感じ。(G)」,「みんなで話を補い合ってるんだと思うんですけど、俺の話は誰にもおぎなえないという感じがきつとどっかにあって。(I)」という語りからは、象徴水準のコミュニケーションを下支えする、情動水準のコミュニケーションが成立しないことへの不安やさびしさが読み取れる。『周囲を生々しく感受する』という、原初的知覚様態の継続が「他者と体験の仕方が違う」状態をもたらし、それにより身体そのもので共鳴し合う、情動的なコミュニケーションを躓かせているのではないだろうか。

また、ASDの人が『周囲を生々しく感受する』という鋭い感受性をもつ一方で、『他者が醸し出すものを捉えにくい』という鈍さをもつ矛盾をどう理解できるだろうか。『周囲を生々しく感受する』という知覚は、強いが未分化で、文脈を持たない細切れの知覚と考えられる。一方、他者とのやりとりの中で醸し出される雰囲気や察するとは、文脈が織りなす意味の世界への参

入である。他者との間に情動的、また間主観的、間身体的コミュニケーションを成立させないことには、この意味の世界を共有することはできない。こうした、原初的知覚様態の継続による鋭さと、情動的コミュニケーションの躓きによる鈍さのアンバランスが、本人を混乱させ、また他者と繋がれない孤独を感じる事態を招いていると推察する。

「世界に馴染めない感じ。…自分一人がカプセルの中に入って、シャボン玉みたいな中に入ってふわふわしていて、人とか何かの環境との間に一つ膜があって…(H)」,「(みんなの中に)自分から入ることは難しいし、相手も俺を引き上げることも多分難しいので、そういうさびしさはあるかもしれないです。あるのは分かってるのに、すごく触れづらい…(I)」こうした語りは、ASDの人はコミュニケーションに障害がある、という一方的かつ客観的な見方だけでなく、さびしさや閉塞感を感じる、彼らの心のあり様にも十分目を向けていく必要があることを伝えている。

③ [おぼろげな自分]を〈抱えてきた自分〉

分析の結果、ASDの人は「自分と繋がりにくい」面と「他者と繋がりにくい」面を持ち、これら二つが影響し合い「おぼろげな自分」を抱えてきたことがわかった。「おぼろげな自分」は、『他者が侵蝕してくる』ことと、『自分の姿が見えてこない』ことから構成される。このことは、佐藤・櫻井(2010)が明らかにした、境界と統合の弱い自己感を持つという特徴と重なる。ASDの人はどのような経緯でこうした「自分」を抱えるようになるのだろうか。

「誰にも影響を受けないし、誰にも影響を与えない…向こうが自分をどう考えているかっていうのはわからないわけだから、そこで自分が何か言ったところで何か変わるとかっていうのも感じたことがない。(G)」,「人と話していて自分がどう思われているのか、そういう部分で自分が安心することができないので。(G)」。これは『自分の姿が見えてこない』という概念に含まれる語りである。こう語るGさんの不安感は、生身の他者とのやりとりである自他二重性(浜田, 1992)の不成立に伴う、自我二重性(浜田, 1992)の不成立からもたらされていると読み取れる。また、この『自分の姿が見えてこない』という概念は、Lee&Hobson(1998)が示した、ASD群は対人関係面での自己理解が相対的に乏しいという考察に対し、その内実を理解する手がかりを提供できるだろう。

さらに、彼らは『他者が侵蝕してくる』という不安感や不快感に覆われることがある。Hさんは「人と会った時に自分の意見が言えないとか、意思が無くなる…(H)」,「自分が0で相手が100になっちゃう…。(H)」と語り、Cさんは「伝えられないから、言いなりになっていいように使われる…(C)」と表現する。この語りからは、能動・受動のやりとり(浜田, 1992)がうまくいかず、もっぱら受動に傾きながらも、なんとか他者と関わっていかうとする姿と捉えられる。佐藤・櫻井(2010)が示したように、ASDの人が対人関係の中で自己を喪失する危機に陥っていく様相が理解できる。

(2) 〈苦悶のサイクル〉

分析の結果、ASDの人は『“できなさ”の中に自分を垣間見る』という苦しさの中で、『自分を隠蔽し“普通”を装おうとする』,『“わからない”事態は悪く見積もる』という、[どうにか生きていく手立て]を講ずるが、その努力がかえって『“できなさ”の中に自分を垣間見る』苦しさを再燃させるサイクルをもつ。また、そこから容易に抜け出すことができないという様相が明らか

となった。このサイクルは、亀井ら(2011)の結果とも一致する。

滝吉・田中(2011)が指摘した、ASD群が相互的な対人性の中で自己を否定的に理解するという特徴は、『“できなさ”の中に自分を垣間見る』姿と重なる。浜田(1992)によると、羞恥という感情は、「自分」の内だけで生じるものではなくて、常に他者の存在、つまり他者のまなごしを前提にしているという。できない「自分」を恥じる「自分」がいるのは、できないことを恥ずかしいとする価値観を他者との生活の中で共同観念として醸成し、「自分」の中に取り込んでいるからだと考えられる。その為『“できなさ”の中に自分を垣間見る』『自分」がいる』ことは、自我二重性(浜田, 1992)の兆しとも捉えられる。しかし、彼らは“できなさ”を感じる出来事を、他者との共同世界の中で文脈も含めて共感的に了解するという経緯を持ちにくい。そのため、失敗や他者からの批判は不安や恐怖として彼らを覆ってしまう。そして、その不安や恐怖は脅迫的に迫りくる恐ろしさから、そうならなければならぬという強迫へと変化し、できない「自分」、ダメな「自分」を生み出すことになるのではないかと。言い換えれば、内なる他者(Wallon, 1956)との対話が表面的で硬直している状態と考えられる。この硬直した対話は『自分を隠蔽し“普通”を装おうとする』強迫的な努力へと結びついていく。広辞苑によれば、普通とはひろく一般に通ずることを意味する。つまり他者とのやりとりの中で見出された、程よい程度ということである。しかし、彼らの言う“普通”とは、「自分」独自の経験に閉ざされた“普通”なのではないか。こうした意味付けは、『“わからない”事態は悪く見積もる』という、彼らなりの手立てにも通じている。野村・別府(2005)が指摘したように、年齢に伴い、ASDの人も自己を定義する際に他者を視野に入れる様になると考えられる。しかし、その定義が硬化し強迫に傾きやすい傾向があることを周囲の人も知ってサポートする必要があるだろう。

(3)〈身体への態度〉

『身体のをきき流す』事で巡り続ける〈苦悶のサイクル〉は、『身体のをきき入れる』またはきき入れざるを得ない所まで本人を追い込んでいく。本研究で導出された“身体のをきき”とは、Wallon(1934)の言う情動と捉えることはできないか。“身体のをきき”を、他者と関係を持ち、自らの社会生活を展開させるために現れ出てくるもの、と捉えてみると、『身体のをきき流す』態度とは、「自分」に閉じる態度を選択しているということになる。「学校にはいなくてはいけないもんだという…どんなに体調悪くても休まないというのがあって。(A)」と、体調の悪さとして現れた情動は、強迫的な認知で抑え込まれている。また、「…イライラしたりすると、(自分に)食べ物与えないということをたまにやって。(H)」、「…また職場にいなくてはいけないと思うのが嫌で、酒を飲むんですよ。(J)」と、拒食やアルコール依存という身体への強硬手段によって情動はねじ伏せられたり、一時的にもみ消されたりする。『身体のをきき流す』とは、すなわち、身体に根ざした「自分」を隠蔽する事と捉えられるのではないかと。

一方、『身体のをきき入れる』とはいかなる体験だろうか。Iさんの場合は、「親とそんな時に凄く口論になったりして…あまりに喧嘩が多すぎて。だから、ちょっと他の人の助けいるよねって。…かなり行き詰まっていたと思いますよ。(I)」と、情動の噴出を制御するために、他者の助けがいることを自覚することで医療機関等の社会資源をたぐり寄せている。また、Jさんの場合は、「誰にも相談ができなくて、一人で抱え込んでしまって、うつみたいな感じになっちゃって、みかねた上司からしばらく休みなさってことになっちゃった…(J)」と、他者か

らの助言によって自らの身体の状態を省みる事となっている。

抑え込まれ、ねじ伏せられてきた情動は出口を求めて暴走し、やがて生体としての機能を乱していく。そして、他者に「自分」を開かざるを得ない状況を作り出し、その役割を果たしているかのようである。本人にとって、『身体の訴えをきき入れる』転機とは不本意なものとして訪れるのかもしれない。しかし、その転機は新たなサイクルを巡るスイッチの役割を果たしているとも考えられる。

(4)〈調整のサイクル〉

分析の結果、『診断名が自分を説明してくれる』という安堵感が「他者と向き合う」ことや「自分と向き合う」ことを支える一方で、『診断名では自分を語りきれない』という満たされなさも抱えていくプロセスが導出された。この結果は、間宮・俵谷(2011)、亀井ら(2011)の解釈ともほぼ一致する。こうした循環の中で「自分」に何が起きているのだろうか。

①診断されることの意味

上述したように、『身体の訴えをきき入れる』ことがスイッチとなり、彼らは「自分」を他者に関き、医療機関等の社会資源と結ばれ、やがて診断告知を受けたり、障害者手帳を取得することとなる。「自分」にASDという診断名が付与される体験とはいかなる体験なのであろうか。

結論から言えば、それは内界に、外界から、束ねられた内なる他者を付与される体験なのではないか。これまでの考察の通り、ASDの人は「他者と繋がりにくい」特徴をもつため、生身の他者とのやりとりが蓄積されず、心の中の対話の相手が育まれにくい。よって『自分の姿が見えてこない』不安と共に「おぼろげな自分」を抱えてきたと考えられる。診断名は、そこに提供され、「自分」の姿を照らし出す役割を果たしていくのではないか。「今まで自分て謎だったんですよ。自分てここわかんないなって。でも広汎性発達障害っていうパスワードを自分にブツと入れた時に、その謎がガラガラガラッと解けた気がして。これが私だった、本当の私に会ったって感じがすごかったです。診断を受けたときに。あー初めましてという、自分に。あなたが私だったのっていう感じがすごくあって。(H)」,「どういう所を直していけばいいのかなみたいな、そういう意味で診断を活用する…(B)」等の語りから、診断名が内なる対話の相手となり、「自分」の姿を照らし出していく様子が読み取れる。

このように、彼らは、束ねられた内なる他者、すなわち診断名を外界から付与され、その確固たる存在が「自分」を説明してくれる安堵を体験する。しかし、あくまでその存在は、自らの体験を束ねた存在ではないため、違和感を抱えることになると考えられる。『診断名では自分を語りきれない』という不満は、体験を束ねる主体としての「自分」が、診断名を抱き込んで調整を始める重要な動きを生んでいると考えられる。

②他者との出会い

次に、『似た体験の他者と分かち合う』、『似た体験の他者が鏡になる』ということの意味について、小林(2000)によるMIUの実践をもとに考えてみたい。MIUは母子間での身体と情動の共鳴を目指していく実践であるが、ASDの当事者同士の場合、体験している世界が近いことが想定されるため、ごく自然な形で身体と情動の共鳴が起こると思われる。例えば、「本当に理屈じゃない部分のそうそう!(H)」を分かち合えたり、「自分が言った事と同じ事を相手が言葉

を変えて言ってくれてるだけなのに、すごい救われた感じがしましたね。これで独りで頑張らなくていいんだって思いましたね。(I)」という語りがあある。この、身体ごと響き合える他者との出会いによって孤独が晴れ、仲間と共に体験に言葉を与えることで「自分」を見出していくプロセスは、成人当事者への支援の手立てを考える上でも注目すべきではないだろうか。

③ 〈調整のサイクル〉のもつ意味

『診断名が自分を説明してくれる』安定の中で「他者と向き合う」こと、そして「自分と向き合う」ことが重要なプロセスであることを述べてきた。改めてこのプロセスがもつ意味を考察したい。

「他者と向き合う」プロセスは、実在の他者との対話的關係を体験し、自他二重性(浜田, 1992)が展開される過程と考えられる。この過程が次第に内化し、内なる他者(Wallon, 1956)が醸成されていく。一方「自分と向き合う」プロセスは、他者を目の前にして行われるのではなく、「自分」の中で行う作業と理解できる。よってそこには内なる他者(Wallon, 1956)との内的な対話の成立が想定され、自我二重性(浜田, 1992)の構造が形成されつつあると捉えられる。他者と共有の意味世界をもちにくい為に「おぼろげな自分」を抱えざるを得ず、〈苦悶のサイクル〉を巡るもがきを経て、ようやく守られた環境で「自分」の殻(浜田, 1992)を形成する時をもつことができた。それがこの〈調整のサイクル〉がもつ意味ではないか。

(5) 〈人の中で生きられる自分の形を探す〉

ASDの人は『診断名が自分を説明してくれる』安堵感と、『診断名では自分を語りきれない』不満感の両方を揺らめく〈調整のサイクル〉を巡り、次第にそのどちらでもない〈人の中で生きられる自分の形を探す〉試みへと向かう。彼らは、〈抱えてきた自分〉をもう一度抱え直すことで、受容と諦めと決心とをないまぜにした『自分を抱え直して生きよう』という態度をもつ。また、社会に位置づき、『人の中で生きよう』と志向する。平野(2014)による報告は、障害者手帳取得を一つの象徴的出来事とし、彼らが『人の中で生きよう』とする姿を切り出したものと位置づけられる。本研究ではさらに、『人の中で生きよう』とするゆえに、再び『“できなさ”の中に自分を垣間見る』こととなり、〈苦悶のサイクル〉に戻っていくという、繰り返されるプロセスが導出された。これをどのように理解することができるだろうか。

鯨岡(2005)によれば、人間は、私は私という面と、私は私たちの中の一人という両面性をバランスして生きている存在であり、また両側のバランスを取ろうとしてはじめて主体となるという。そしてこのことを根源的両義性と表現する。本研究で明らかとなった、『自分を抱え直して生きよう』としつつ、『人の中で生きよう』ともする彼らの姿は、まさにこの根源的両義性を生きる姿と理解できよう。しかし、ASDの人ができなさをどう引き受け「自分」をいかに抱えて生きていくか、を模索しながらも、再び〈苦悶のサイクル〉に生きてしまう背景には、世間に浸透した、できることの増大こそがよりよい発達だとする発達観(鯨岡, 2005)との強い葛藤が浮かび上がっていると考えられる。ASDを含む発達障害の人たちはこの矢面に立たされている存在なのではないだろうか。しかし、それは同時に多くの人が抱える葛藤の露出とも理解できる。

5. 本研究の成果と課題

ASDの人が抱える「自分」の様相を、部分でなくプロセスを通して一定程度説明できたことは、本研究の成果と考える。この成果の実践的な活用方法として、サポートする側においては、対象者が現在プロセスのどの辺りに立っているかを予測し、サポート内容を検討することに役立つことができるのではないか。また、当事者においては、プロセスの流れや概念名等を、他者に「自分」を語る手がかりとして活用することが期待できる。

さらに、本研究において『身体の訴えをきき入れる』ことが、「自分」を他者に関く動因となっていることが明らかとなった。この点については、今後、ASDの人に対し『身体の訴えをきき入れる』機会をいかに設定し、〈調整のサイクル〉への移行をいかに促していくことができるか、その実践的、支援的方法を検討する課題が残された。

謝辞

分析にお力添えいただきました、北海道M-GTA研究会の皆様にご心より感謝申し上げます。また、誠実な語りを託して下さいました、10名の調査協力者の方々に厚く御礼申し上げます。

(参考・引用文献)

- American psychiatric association (2013): Diagnostic and statistical manual of mental disorders, Fifth edition.
(高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(監訳)(2014): DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 東京, 医学書院.)
- 浜田寿美男(編)(1992): 〈私〉というもののなりたち. 京都, ミネルヴァ書房.
- 浜田寿美男(2009): 私と他者と語りの世界 精神の生態学へ向けて. 京都, ミネルヴァ書房.
- 平野郁子(2014): 発達障害のある人が障害者手帳をもって生きる体験—青年期以降に診断を受けた取得者へのインタビューから. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 120, 1-22.
- Kanner, L.(1943): Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250 (十亀史郎, 斎藤聡明, 岩本憲(訳)(1978): 情動的交流の自閉的障害 幼児自閉症の研究 1章 (pp.10-55) 名古屋, 黎明書房.
- 亀井菜月, 武内珠美, 佐藤晋治(2011): 高機能広汎性発達障害者の自己理解の心理的プロセスと理解・対応に関する研究. 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要, 29, 29-43.
- 木下康仁(1999): グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的研究の再生. 東京, 弘文堂.
- 木下康仁(2003): グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 東京, 弘文堂.
- 木下康仁(2007): ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 東京, 弘文堂.
- 木下康仁(2009): 質的研究と記述の厚み—M-GTA・事例・エスノグラフィー. 東京, 弘文堂.
- 小林隆児(1993): 自閉症—その多彩な臨床症状をどのように理解できるか—. *臨床精神医学*, 22, 575-581.
- 小林隆児(1999): 自閉症の発達精神病理と治療. 東京, 岩崎学術出版社.
- 小林隆児(2000): 自閉症の関係障害臨床. 京都, ミネルヴァ書房.
- 小林隆児(2003): 広汎性発達障害にみられる「自明性の喪失」に関する発達論的検討. *精神神経学雑誌*, 105 (8), 1045-1062.

- 小林隆児, 鯨岡峻 (編著) (2005): 自閉症の関係発達臨床. 東京, 日本評論社.
- 小林隆児 (2014): 「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム. 京都, ミネルヴァ書房.
- 越川房子 (1999): 自己. 中島義明・安藤清志・子安増生他 (編): 心理学辞典 (pp323-324). 東京, 有斐閣.
- 鯨岡峻 (2005): 「関係発達」について. 小林隆児・鯨岡峻 (編著): 自閉症の関係発達臨床 (pp2-45). 東京, 日本評論社.
- 鯨岡峻 (2007): 発達障碍とは何か—関係発達の視点による「軽度」の再検討. 現代のエスプリ (474), 122-128.
- Lee, A. & Hobson, R.P. (1998): On developing self-concept: A controlled study of children and adolescents with autism. *Journal of child psychology and psychiatry*, 39, 8, 1131-1144. (岡田俊 (訳) (2000): 自閉症児の自己概念の発達. 高木隆郎他 (編): 自閉症と発達障害研究の進歩 (pp263-284). 2000/Vol.4. 東京, 星和書店.)
- 間宮正幸, 俵谷知美 (2011): 成人後の「診断・告知」とその人の理解. 田中康雄 (編): 発達障害は生きづらさをつくりだすのか (pp125-143). 東京, 金子書房.
- 野村香代, 別府哲 (2005): 高機能自閉症児における自己概念の発達. 日本特殊教育学会 第43回大会発表論文集, 406.
- Rutter, M. (1968): Concepts of autism: a review of research. *Journal of child psychology and psychiatry and Allied Disciplines* 9 (1), 1-25.
- 杉山登志郎, 未田佳代, 西沢めぐ美他 (1998): 高機能広汎性発達障害青年の手記の分析. 幼児医学・心理学研究, 7 (1), 41-49.
- 佐藤由宇, 櫻井未央 (2010): 広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相. 発達心理学研究, 21 (2), 147-157.
- Stern, D. (1985): The interpersonal world of the infant, A view from psychoanalysis and developmental psychology. New York, Basic books, Inc. (小比木啓吾, 丸田俊彦 (監訳), 神庭靖子, 神庭重信 (訳) (1989): 乳児の対人世界 理論編. 東京, 岩崎学術出版社.)
- 滝吉美知香, 田中真理 (2011): 思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解. 発達心理学研究, 22 (3), 215-227.
- Wallon, H. (1934/1948): Les origines du caractère chez l'enfant—Les préludes du sentiment de personnalité —. Bolvin.; 2^e ed., P.U.F. (久保田正人 (訳) (1965): 児童における性格の起源. 東京, 明治図書.)
- Wallon, H. (1956): Niveaux et fluctuations du moi, *Évol. Psychiatr.*, 1, 389-401; rééd. in *Enfance*, 1963, 1-2, 87-98. (麻生武・浜田寿美男共訳 (1983): 自我の水準とその変動. 浜田寿美男 (訳編) ワロン/ 身体・自我・社会 第1部 1, pp. 23-51. 京都, ミネルヴァ書房, 1983年.)
- Werner, H. (1948): Comparative psychology of mental development. New York, International University Press. (鯨岡峻, 浜田寿美男訳 (1976): 発達心理学入門. 京都, ミネルヴァ書房.)
- Williams, D. (1992): Nobody nowhere. Transworld Publishers Ltd., London. (河口万理子 (訳) (1993): 自閉症だった私へ. 東京, 新潮社)
- Wing, L. (1981): Asperger's syndrome: A clinical account. *Psychological medicine*, 11, 115-129. (託摩武元, 高木隆郎 (訳) (2000): アスペルガー症候群: 臨床知見 高木隆郎・マイケル・ラター・エリック・ショブラー (編) 自閉症と発達障害研究の進歩2000/Vol. 47章 (pp.102-120) 東京, 星和書店.)

Self Experience for the Person with Autism Spectrum Disorders

– Qualitative Study by M-GTA –

Michiko KIYA

Key Words

autism spectrum disorder, self, adulthood, interview investigation

Abstract

The purpose of this study is to make it clear what kind of self a person of ASD experienced.

Ten people with ASD were spoken with. These ten people were diagnosed with ASD as adults and several years had passed since diagnosis. They were asked to talk about their experience since the diagnosis.

The analysis with M-GTA gives the following results that people have tried to associate other people with the pain of “vague self” in order to survive. Furthermore, they went round. “the cycles of the agony” by. “ignoring the physical voice”. And they moved to “a cycle of the adjustment” by “hearing the physical voice”. Additionally, they “looks for form of appropriate self to live among people”. However, they return to “to realize self that can not to do it”. This is because they “live among people”. And they comes back for “a cycle of the agony”. The person of ASD performed a process to find out self and came and continued it.